

ニューエイジ的なトレンド

ブラジルでは日本の書店でみかける「精神世界」や「ポジティブシンキング」といったセクションが、「自助 (Auto ajuda)」と命名されて並んでいる。日本と同様、ブラジルの一般読者の間でも精神的・霊的な内容の書籍を好んで読む人は少なくない。たとえば、世界的なベストセラーとして知られるジェームズ・レッドフィールドの『聖なる予言』が一定の反響を呼んでいる。この本は、霊的次元の「知恵」を獲得し、「聖なるエネルギー」に目覚めることをテーマとしたフィクションである。このような分野の関心の高まりをニューエイジ的なトレンドと呼ぶ。1980年代以降、先進国を中心に広がってきた。

ニューエイジの思想によるとキリストや神という絶対者は相対化され、人間に内在する無限の能力や自己のトータルな本来性、そして神性が評価される。その意味で、ニューエイジとは、自己に内在する宗教性を追求する精神的な運動である。それはまた、自己の霊性の探究でもあり、「ほんとうの私」の追求でもある。そこでは、「心・身体・霊」を統合するホーリスティックな思考を促し、それによって個人の自己実現や自己変革が達成されると考えられている。

このような思考法が生まれてきた背景には、近代的な文明観への反動がある。近代文明は科学の進歩という名の元に伝統的な価値観を切り刻んできた。個人は、一方では共同体的な価値や拘束から解放されながらも、他方では頼るべきなものもなく孤立した自分を頼りに生きていかざるをえなくなった。個人は他者から分断された日常を生きるようになり、個別化された自身の存在それ自体をも危機に陥らせる可能性を抱えるようになった。こうした価値分断的な思考法に対峙するかのようになんて生まれてきたのがニューエイジだということもできる。それは、エコロジーの思想にみられるように、地球を一個の生命体として理解し、あらゆる存在物は連带的に統合されると見なす視点に現れている。この意味において、ニューエイジは近代的価値観が捨象してきた伝統への回帰としても理解できる。

ところでローマ法王パウロ二世は、1993年に米国の司教らにたいして、ニューエイジはシンクレティックな思想にもとづく疑似宗教的な運動で、東洋の霊性とテクニックを伝える知識及び体験を用いて人々のキリスト教信仰を惑わすと警告したことがある。というのも、その思想によれば今やキリスト教の時代が終焉を迎えていると理解されるからである。実は「ニューエイジ」とは占星術の理論に依拠し、現代が魚座から水瓶座の時代に移行する時期だとされる。初期のキリスト教信者がイエス・キリストを魚として象徴させていたことから、魚座の時代＝キリスト教の時代が終焉を迎えているというのである。

カトリック神父ジョアン・カルロス・アウメイダはブラジルの一般的なカトリック信者に向けて『ニューエイジとキリスト信仰』を出版した。その本で彼は、ニューエイジは新たな救済者の出現を求めており、人々をキリストから離反させると訴えている。彼はまた、スウェーデンボルグ (1688～1772) やブラバツキー (1831～1891) の思想も東洋的な思想運動として

危険視する。さらに、「精神世界」の著作で多くのベストセラーを生んでいるブラジルのカトリック神父ラウロ・トレビサンも非難されている。

ラウロ神父の有名な作品は、『心の無限能力』(1980) や『祈りの無限能力』(1988) などである。特に『心の無限能力』は33刷77万冊という、ブラジルの出版業界では記録的な販売部数を飾った。ここでは、その著作に生長の家の教祖谷口雅春のメッセージがしばしば引用されていることに注目しておきたい。神父が谷口の思想に影響を受けていることが理解できるからである。たとえば『祈りの無限能力』には、谷口の次の言葉が引用されている。

あなたが神の子であるとの確信を持ち、神に対して祈るのならば、〈既に与えられている〉ことを感謝しなさい。そうすれば適切な時期と場所で望んでいることが実現し、相応しい人や物事が動き始めるようになるのです。時には破壊的に見える事件も起こります。しかし、そのような事件は土台を踏みしめるための地均しであり地固めなのです。ですから、表面的なものごとに囚われてはならず、また信仰の種を掘り返してはならないのです。

本文では、谷口を東洋の思想家として紹介するにとどまっている。仮に生長の家信者がラウロ神父の作品を読んだとき、自分の選んだ信仰が間違っていなかったと確信するだろう。しかし、それはカトリック教会にとって憂慮される事態である。カトリック教会においてラウロ神父はニューエイジの広告塔だとして危険視されているが、この事例は奇しくも生長の家を含めた東洋の思想 (日本の新宗教) がカトリック教会に好ましくない存在としてみなされていることを物語っている。

さらに、アウメイダ神父は、レオナルド・ポフ元神父もニューエイジ的な思想の影響を受けていると批判する。ポフはかつて解放の神学 (第6回で記載) の急進的な論者だったことから、教会側から神父の地位を剥奪された経緯がある。1994年に単独で『エコロジー・世界化・霊性』、そして共著で『神秘と霊性』を出版している。いずれもホーリスティックな視点から霊性を捉えなおし、その復権を述べた作品である。ポフらは、西洋近代の分断的な思考様式を超克する必要性が生まれているという危機的状況が霊的なものの活性化に人々を導いているのだと指摘する。その上で、個人のこれまでの宗教的実践の場として機能してきた教団宗教にたいして疑義を呈している。

すなわち、「歴史的宗教の現代的危機は、深遠な神の体験の欠如にある。その代わりに、位階制、布教師、教義学者などの宗教権力が幅を利かせている。これらの権力は、自分にたいするほどの関心を神の真理に示していない」という。そして、「ウンバンダ、カンドンブレ、禅仏教、プロテスタンティズムなど、あらゆる道を通じて神に至ることができる。真理の独占をしようなどと試みたり、我々の道だけが神に至ることができてその他は偶像に到達するのだと考えることは傲慢である」とも述べている。特定の宗教権力を権威づけてきた従来のカトリック教会制度に疑義を呈し、教会体制に捕られるこのない霊威的次元への個人的な接続を重視しようというのである。